

WEP

ウエップ俳句通信

VOL. 55

俳句通信

特別作品25句 ● 金久美智子「草笛」

特集Ⅰ ● 加藤楸邨の〈詩性〉について

神田ひろみ・林 桂・河内静魚・中村正幸

特集Ⅱ ● シリーズ「遍路」句集 4冊を読む

國保八江・大崎紀夫・里川水草・西池冬扇

【特別寄稿】

「美術工芸作品を詠む」吉岡桂六

【実力作家競詠 20 句】

船越淑子「風の墓標」

林萬壽美「春寒」

高橋さえ子「師の句碑」

好井由江「春の象」

【新作 50 句】

「江差追分考」波戸岡旭

作品 ● 花谷和子・猪俣千代子・神蔵器・大峯

あきら・鈴木貞雄・堀口俊一・山本つ

はみ・中山世一・山崎十生・田嶋岬・

中村雅樹・角谷昌子 ほか

● 好評エッセイ ●

視野遠近「龍太の“山”」廣瀬直人

夢「桑畑」倉田純文

伝統の探求②「平明」筑紫磐井

戦後の俳人たち「鮎山 實」松岡ひでたか

虚子の肖像「古壺新酒」坊城俊樹

賢子の素粒子「作詞家・賢子」品川鈴子

時空の座・拾遺「暗い空也、明るい一瀬」西池冬扇





書齋にて

八田木枯

特集Ⅰ 加藤楸邨の〈詩性〉 について

昭和59年に楸邨が「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」を発表したとき、その反応は賛否いろいろあったそうですが、飯田龍太は「異様な感銘を受けた。『なんだこれは。一体、どういうことだ』という疑念が頭をかすめ去りながら、不思議に印象鮮明」と書き、「これぞまさしく磊塊（らいかい）の化身にちがいない」といっています。「（正体不明の）磊塊の方から時折勝手に主（あるじ）を呼びつけて俳句を強要するらしい」「多分氏の磊塊は、どうやら一匹や二匹ではないようである」とも。

飯田龍太を驚かせた楸邨俳句には、あるいは独特な〈詩性〉があるのかもしれませんが。龍太のいう「一匹や二匹でない」磊塊をその作品群から見つけ出し、それらの磊塊が楸邨に強要した〈詩性〉について、それをどう読むかなどについて、4人の俳人にお書きいただきました。



特集Ⅱ シリーズ『遍路』句集 4冊を読む

2009年からこの2010年にかけて本社から4冊の『遍路』句集が出版されました。春夏秋冬のそれぞれの季節に5人の俳人が四国88ヶ所を一国ずつ巡り、その遍路行で詠んだ句を國保八江氏、里川水章氏、西池冬扇氏、大崎紀夫の4人がそれぞれ1冊にまとめたものです。

大崎 四国遍路の旅を5人で行ったのは、2007年の夏から2008年の春にかけてでした。夏の土佐を皮切りに、秋の伊予、冬の讃岐、春の阿波と巡ったわけですが、水章さんは驛の手術のために讃岐と阿波の札所を打つのが1年遅れになりました。その5人のうちの4人が「遍路」という共通のタイトルにそれぞれのサブタイトルを付けて、句集を出すことにして、ここに4冊が揃いました。それでこの4冊をお互いに読み合おうというわけです。その前に簡単に各自がこの遍路行に参加したわけを述べていただきたいと思いますが、みなさんを誘ったのはわたしです。で、まずわたしから――。

これはわたしの句集のあとがきでも書いたことなのですが、土佐にヘラブナ釣りにいったとき、たまたま36番札所の青龍寺に寄ったのです。そのとき寺までの道のわきに石仏の間を置いて並んでいて、その石仏の周りにたくさん石路の花が咲いていたわけです。いい風景でした。それで四季折々に札所を巡って句を詠んだら面白いかな、と思ったのが動機です。

里川 わたしはお誘いを受けたとき、亡妻の供養のために1度遍路の旅に出てみてほしいかな、それに88ヶ所を巡って句を詠むのもまた修行かなとひそかに思ったりしました。